

第 11 話 戦争とロジスティクス

ロジスティクスを兵站と訳すのは今では一般的になった。Logistics の語源はフランス語の Logistique から来ており、ナポレオンの時代には既に使われていた言葉である。兵站という意味で前線にいる味方に物資や弾薬を届けることだと理解しているのが一般常識であろう。

軍事用語であるロジスティクスは、旧日本軍では『兵站補給』と訳し、現在の自衛隊は『兵站、後方、後方補給』と定義しているそうである。『兵站』とは、前線の後方支援部隊としての補給等の活動のことである。日本ではあくまでも後方のイメージが強く、前線部隊と比べて軽く見られる印象がある。欧米の軍隊におけるロジスティクスとは、『多くの人間と装備が関与する場合に、複雑な作戦を成功させるために必要とされる実際的な機構』と、かなり広範囲な概念で捉えられている。ソクラテスに、『戦いにおいて、第一にして最も重要な能力』と言わしめるほど、古代ギリシャ時代からロジスティクスは重視されてきた。(日経 BP 社、江畑謙介著、軍事とロジスティクスより)

「用を国に取り、糧を敵に因る。故に軍食足るべきなり」とは、必要な武具・用具などは自国でまかなうが、食料は敵のものを使う。したがって、軍の食料は十分に足りているのである。こんな論法でインパール作戦を命令した指揮官によって二万の日本兵が餓死するハメになったが、ロジスティクスを軽んじた作戦の末路である。対する英国軍は孤立するインパールに落下傘で弾薬・食料、更には戦車やジープまで投下して支援したのである。

最近では私も最前線で物流改善などの指揮を取ることも少なくなったが、ロジスティクスをどう捉えるかは企業によって大きく違いがあるということを体験してきた。ビジネスにおけるロジスティクスは、製品開発から調達、生産、物流、販売(返品や家電のリサイクルまでの範囲もある)までのモノの流れの最適化の意味で用いられる。最近ではアパレルにおいて、顧客の好みに合わせた服を短時間で市場に投入できる、俊敏で無駄な在庫を持たないロジスティクスを構築している企業が勝ち組となっている。温故知新という言葉があるが、軍事専門家のお話からロジスティクスを見直すのも有用かも知れない。